

## 【福祉文化批評】

### 福祉文化批評をどう書くか

10月23日に開かれた福祉文化京都大会では、分科会の一つとして「福祉文化を深読みする」セッションが設けられ、そこで福祉文化を研究することの意味が改めて確認されました。その要点は以下のとおりです。

\*

福祉文化研究とは、「福祉文化」を研究するのではなく、「福祉」を「文化研究」することであるという視点から、社会福祉領域に現れている諸事象を取り上げ、それらを文化批評的に検討することを目指す。一見、当たり前のこととして受け入れられている社会福祉の常識について、その背景やそれを支える文化を洗い直し、また、社会・経済的な視点からその実相を深く読み解いて、これからの社会福祉のあるべき姿を探る。

\*

ここで「文化研究」とされているのは、文化社会学で「カルチュラル・スタディーズ」という用語で語られている研究方法です。社会福祉も広義の文化の一環である以上、その社会の支配的文化が持つさまざまな歪みやねじれを引き受けざるを得ません。文化の持つイデオロギー性や権力（支配）との関係、ジェンダーの視点やサブ・カルチャーとの関わりの追求は、福祉を文化的に批判する上で欠かせないテーマと言えます。文化研究の主流となったカルチュラル・スタディーズの方法論を取り入れて、これまでの福祉文化研究を見直してみようということです。「福祉文化批評」のページは、その成果発表の場として設けられ、これまでさまざまな視点からの「批評」が投稿されてきました。

それでは実際に福祉文化批評はどのように書いたらよいのでしょうか。どういう視点から、どんな切り口で書くべきかを考えてみたいと思います。そのために1つの実例を踏まえて考察を試みます。俎上に乗っていただくのは、この欄に投稿された「**日本パラ陸上競技選手権大会の同行援護と競技中の支援で 神戸に行ってきました！**」という佐伯典彦氏の文章です。三重県で開かれた日本パラスポーツ選手権大会に出場した視覚障がい者の選手に「同行援護」した佐伯氏は、研修を終えたばかりの初めての援護体験の詳細をレポートしています。

佐伯氏にとってはすべてが新鮮で驚きの連続、競技会の舞台裏をのぞき、増田明美さんにも会えたことなど、またとない体験を楽しそうにレポートされています。しかし、残念ながら全体が珍しい体験の個人的な報告に終始して、それ以上の広がりがありません。読者としては次のようなことをもっと知りたいと思わざるを得ません。

- \* 障害のある選手の日常生活はどんなものか、その中でどのように競技のための練習をしているのか、どんな点で苦労があるのか。
- \* 競技のルールは障害を考慮してどんな工夫がされているのか。それはどういう効果を持っているか、問題はないのか。
- \* 支援の体制はどのように組み立てられているのか。「同行援護」とはどんな役割を担うのか、そのために援護者にはどんな研修が課せられるのか。
- \* この大会の運営はどんな機関や団体が担っているのか、公的な援助やスポンサーはどうなっているのか。

このような、この文章を読む人ならだれもが抱く疑問点に少しでも応えるような説明が書かれていると、この文章は単なる感想文ではなくて、障がい者スポーツの現状を紹介するルポルタージュに近づきます。さらに、それぞれについて解決すべき問題点を指摘して筆者なりの提案を行えば1つの「評論」としての価値が出てきます。

福祉文化批評としては、さらに一步を進めた「深読み」が求められます。例えば、この文章に競技参加者がたいへん少なく、出場すればみな入賞するということが紹介されています。では、なぜ参加選手が少ないのでしょうか。障がい者スポーツの実践は望ましいことであり、素晴らしいことですが、実際に競技に参加することのできるのはごく一部の障がい者に限られてしまう。それは当事者の意欲や能力の問題もあるでしょうが、それ以上に経済的な障壁があるのかもしれないし、経済力があっても周囲の支援体制を整えることができないのかもしれない。そのあたりを取材し、調査して、障がい者スポーツの「阻害条件」について考察すれば有意義な福祉文化批評が成り立つでしょう。

昨年のパラリンピックで障がいのある選手たちが大活躍するシーンがテレビで放映され、多くの国民に感動を与えてくれました。障がいがあってもそれを乗り越え、素晴らしい成果を出すことができる――障がい者も努力して頑張れば常人を超える実力を示すことができるのだ。多くの人がそうした感想を持ったことと思われます。

そこには1つの落とし穴がある、という見方が「文化批評」です。努力すれば成果が出る、一人一人の頑張りこそが重要だという論理は、生活の改善のためには「自助」が土台にならねばならないという隠れたメッセージを含んでいます。これをさらに延長すると、生活に困窮するのは個人の努力が足りないからだという、勝者のイデオロギーに結びついていきます。これは「一人一人の生活権」から出発した戦後の福祉政策を根底から見直す新自由主義の政策に近づく考え方です。

障がい者のスポーツを話題にするにあたって、その最先端で活躍するパラリンピック選手に注目するだけではなく、スポーツは苦手と思っているごく普通の障がい者にとってのスポーツの意味を考えることを忘れることはできません。身体を動かす楽しみは万人のも

のであり、いろいろな障害があっても、楽しく、面白く動くことのできるプログラムを開発することが重要です。それも子どもころから高齢期に至るまで、生涯にわたって楽しめるスポーツを自分のものにする必要があります。「障がい者にとっての生涯スポーツ」にもっと真剣に取り組まねばなりません。パラリンピックの成果をそのように読み替えることこそ福祉文化批評の役割なのです。